

# INTERSPEECH 2010

2010年 9月 26日 ~ 30日

## 賛助趣意書

主 催

International Speech Communication Association (ISCA)  
INTERSPEECH 2010 実行委員会

INTERSPEECH 2010 賛助委員会

## 1. 会議の名称

和文名：インタースピーチ 2010 – 音声言語処理国際会議 2010–

英文名：INTERSPEECH 2010

## 2. 共催：International Speech Communication Association (ISCA)

INTERSPEECH 2010 実行委員会

## 3. 協賛：電子情報通信学会      情報処理学会      日本音響学会          日本人工知能学会      言語処理学会      信号処理学会          日本音声学会      日本言語学会      日本音声言語医学会          日本認知科学会      IEEE Japan Council      IEEE SP Society Japan      他

後援：千葉コンベンションビューロー

## 4. 開催時期：2010年9月26日～30日（5日間）

## 5. 開催場所：幕張メッセ国際会議場

〒261-0023 千葉市美浜区中瀬 2-1 (Tel.043-296-0001)

## 6. 会議の性格と目的

INTERSPEECH は、音声言語研究者の国際的な組織 International Speech Communication Association (ISCA) が主催する音声言語処理分野で最も大規模かつ重要な国際会議で、従来、毎年8月～10月の間に開催されており、人間及び機械における音声言語の処理に関して、自然科学・人文科学の別なく、かつ基礎から応用までの全分野を包括する学際的な研究発表と討議の場としてのユニークな性格をもち、これらの分野の最新の成果を通じて、人類社会の進歩・文明の発展・福祉の向上に資することを目的としている。

## 7. 現在までの経緯と日本開催の意義

### (1) 経緯

この国際会議 (INTERSPEECH) は、1990年に東京大学藤崎教授 (当時) が、人間及び機械による音声言語の処理に関して自然科学・人文科学の別なく、かつ基礎から応用までの全分野を包括する学際的な国際会議 (International Conference on Spoken Language Processing) として提唱し、全世界の主要な研究者の賛同のもとに、日本でその第1回目 (神戸) を開催して以来、隔年の国際会議として定着したもので、この会議の名称の Processing とは、単に技術的な処理を指すのではなく、人間・機械を問わず、音声言語の生成・知覚・合成・認識などをすべて包括するものと明記しており、設立の当初

から、全世界・あらゆる分野の研究者の公平・平等な参画を認める国際（International）性と学際（Interdisciplinary）性とを重視しており、2000年からは INTERSPEECH を正式名称としている。なお、2002年以降は、それまで奇数年度にヨーロッパで開催されていた欧州音声通信・技術会議（European Conference on Speech Technology、略称 EUROSPEECH）と合体し、毎年開催されるに至った。後者は元来ヨーロッパ主体の会議として発足したもので、その母体（European Speech Communication Association）の運営も、ヨーロッパ在住者に限定していたが、1999年に国際的組織として改組され、2004年以降は INTERSPEECH の主催団体となっている。

2010年の日本開催は、1994年（第3回、横浜）以来、16年ぶりである。その間米国で3回、オーストラリアでも2回開催されており、当該分野の研究者数および研究実績で示される日本の実力からすれば、日本開催は当然であり、世界的な要請である。

なお、2000年以降の開催（含予定）は以下の通りである。

開催年月日	開催地	参加概数	実行委員長
2000年10月16～20日	中国 北京	1000名	Ding-hua Guan (Institute of Acoustics, CAS)
2002年9月16～20日	米国 Denver	950名	John H. L. Hansen (Univ. of Colorado at Boulder)
2003年9月1～4日	スイス Geneva	1100名	Hervé Bourlard (IDIAP Research Institute)
2004年10月4～8日	韓国 Jeju 島	850名	Soon-Hyob Kim (Kwangwoon Univ.)
2005年9月4～8日	ポルトガル Lisbon	1300名	Isabel Trancoso (INESC ID/IST)
2006年9月17～21日	米国 Pittsburgh	1050名	Richard M. Stern (Carnegie-Mellon Univ.)
2007年8月27～31日	ベルギー Antwerp	1100名	Dirk Van Compernelle (K.U.Leuven)
2008年9月22～26日	オーストラリア Brisbane	800名	Denis Burnham (Univ. of Western Sydney)
2009年9月6～10日	英国 Brighton	1100名	Roger K. Moore (Univ. of Sheffield)
<b>2010年9月26～30日</b>	<b>日本 幕張</b>		<b>Keikichi Hirose (Univ. of Tokyo)</b>
2011年8月27～31日	イタリア Florence		Piero Cosi (spfd CNR)
2012年9月9～13日	米国 Portland		Jan P. H. van Santen (Oregon Health & Science Univ.)

## (2) 意義

1990年に日本で創設されたこの会議の基本理念は、従来ともすれば音響的信号としてのみ扱われていた音声、言語の一形態であることを明示し、文字言語を対象とする従来の自然言語処理ではなく、音声の信号的側面と記号的側面とを統一的に扱う新しい学問分野としての『音声言語処理 (Spoken Language Processing)』を明確に規定し、これを学際的領域として取り上げたことである。しかしながらこの理念は、音声通信・技術を対象として設立された EUROSPEECH には十分には浸透しておらず、両者の合体後はこの特色がややもすれば希薄になり、工学・技術面が主となる傾向があった。この会議を2010年に日本で開催する意義は、この機会に創立当初の基本理念を改めて明確化するとともに、以来20年間の進歩をふまえ、それをさらに具体化し、人間及び機

械の両方における音声言語の処理にかかわる学術の、飛躍的な発展に資する点にある。さらにこの会議では、毎回、重点とする主テーマを掲げることが認められているが、今回の会議は、『すべての人間と環境を対象とする音声言語処理 (Spoken Language Processing for All)』を主テーマとして掲げ、年齢・言語・健康状態・環境の差異にかかわらず、すべての人間における音声言語の発達・獲得・教育・障害・治療・回復の過程、また、そのために役立つ方法・処理技術等を、音声学・言語学・生理学・心理学・教育学・医学・福祉学・工学の総合的な視野からとりあげ、最新の知見・研究成果の発表と討論を行う計画であり、その学際的意義は極めて大きく、国際社会の発展と人類の福祉増進のために期待される成果も大きい。

このように、音声言語処理に関する国際会議を日本で開催することはわが国の国際的責務でもあり、音声言語処理研究の国際的な進展に寄与するとともに、わが国における今後の研究の推進、関連産業の発展のためにも極めて大きな意義がある。

## 8. 会議計画の概要

### (1) 会議の構成

- 特別講演：9月27日の開会式に引き続き、音声言語処理研究を代表する研究者1名 (ISCAメダル受賞者) に依頼する。
- 基調講演：音声言語処理の先端的研究を行っている研究者3人に依頼する。
- 特別セッション：特定のテーマを設け、招待講演および投稿による一般講演で組織する。
- 一般セッション：一般投稿による講演で組織する。オーラルセッション(3~4会場予定) とポスターセッションとで構成される。
- チュートリアル：音声言語処理の各分野で活躍している研究者に依頼し、9月26日に実施する。8件以内を予定。
- 技術展示会：音声言語処理に関連した技術の展示、デモを行う。
- バンケット：参加者の懇親を深めるため、9月29日に行う。
- ウェルカム・レセプション：参加者の懇親を深めるために行う。9月27日を予定。
- スチューデント・レセプション：諸外国からの学生参加者の懇親と各国の著名研究者との意見交換の場を提供する。9月28日を予定。
- ISCA 関連委員会：主催団体の ISCA の Board メンバー会合、アドバイザーメンバー会合等を行う。

### (2) 主要題目

メインテーマ：『Spoken language processing for all ages, health conditions, native languages, and environments』 (年齢、身体的状況、母語、環境の違いにとられない音声言語処理を目指して)

セッション：下記のように音声言語処理全般にわたるテーマでセッションを予定している。

- 音声生成
- 音声分析
- 音声知覚
- 言語音韻論
- パラ・非言語
- 多言語、方言
- 音声符号化
- 音声合成
- 音声認識
- 話者識別、言語識別
- 雑音除去、音源分離
- 音声／言語コーパス
- 音声対話、マルチモーダル
- 音声言語教育
- 言語獲得、発達
- 音声言語の病理、障害者補助
- その他

(3) 日程表

	午前	午後	夜
9月26日(日)	チュートリアル	チュートリアル	
9月27日(月)	開会式/特別講演/セッション	セッション	ウェルカム・レセプション
9月28日(火)	基調講演/セッション	セッション	スチューデント・レセプション
9月29日(水)	基調講演/セッション	セッション	バンケット
9月30日(木)	基調講演/セッション	セッション/閉会式	

(4) 会議使用語

英語。

(5) 参加予定国

アイルランド, アメリカ合衆国, アルゼンチン, イギリス, イスラエル, イタリア, インド, インドネシア, エストニア, オーストラリア, オーストリア, オランダ, カナダ, 韓国, ギリシャ, コロンビア, シンガポール, スイス, スウェーデン, スペイン, スロヴァキア, タイ, 台湾, チェコ, 中国, デンマーク, ドイツ, トルコ, 日本, ニュージーランド, ネパール, ノルウェー, ハンガリー, バングラデッシュ, フィンランド, フランス, ブラジル, ベトナム, ベルギー, ポーランド, ポルトガル, メキシコ, モロッコ, ユーゴスラビア, リトアニア, ルーマニア, ロシア他

(6) 参加予定者数 (含む 招待)

海外 520 人  
 国内 310 人  
 計 830 人

(7) 会議論文集 (プロシーディングス)

特別講演、基調講演、一般セッションの原稿を掲載する会議論文集 (プロシーディングス) については CD-ROM (あるいは USB) およびアブストラクト集として作成し、

配布することを予定する。

(8) 展示会

ポスター・デモなどによる学術展示と音響学、音声学、音声工学関連機器・ソフトウェアなどの商業展示を行う。

(9) 著名な海外, 国内参加者

(海外)

Gérard BAILLY	(Université Stendhal, France)
Rolf CARLSON	(KTH, Sweden)
Daniel HIRST	(Université de Provence, France)
Rénato DE MORI	(Université d'Avignon, France)
Joseph MARIANI	(LIMSI-CNRS, France)
Bernd MÖBIUS	(Universität Stuttgart, Germany)
Roger MOORE	(University of Sheffield, UK)
Alan BLACK	(Carnegie Mellon University, USA)
Anne CUTLER	(Max-Planck-Institute for Psycholinguistics, The Netherlands)
Grazyna DEMENKO	(Adam Mickiewicz University of Poznan, Poland)
Björn GRANSTRÖM	(KTH, Sweden)
Eva HAJIČOVÁ	(Charles University, Czech Republic)
Hynek HERMANŠKY	(Johns Hopkins University, USA)
Wolfgang HESS	(University of Bonn, Germany)
Julia HIRSCHBERG	(Columbia University, USA, ISCA Ex-President)
David HOUSE	(KTH, Sweden)
Fred JELINEK	(Johns Hopkins University, USA)
Simon KING	(University of Edinburgh, UK)
Chin-Hui LEE	(Georgia Institute of Technology, USA)
Lin-Shan LEE	(National Taiwan University, Taiwan)
HyunBok LEE	(Seoul National University, Korea)
Aijun Li	(Institute of Linguistics, CASS, China)
Sudaporn LUKSANEEYANAWIN	(Chulalongkorn University, Thailand)
Helen MENG	(The Chinese University of Hong-Kong, Hong-Kong)
Hansjoerg MIXDORFF	(Berlin University of Applied Sciences, Germany)
Hermann NEY	(RWTH Aachen, Germany)
John OHALA	(University of California at Berkeley, USA)
Mari OSTENDORF	(University of Washington, USA)
Douglas O'SHAUGHNESSY	(Université du Québec, Canada)

Michael PICHENY	(IBM, USA)
Louis POLS	(University of Amsterdam, The Netherlands)
Tanja SCHULTZ	(Universität Karlsruhe, Germany)
Frank SOONG	(Microsoft Asia, China)
Kari SUOMI	(University of Oulu, Finland)
JianHua TAO	(Institute of Automation, CAS, China)
Isabel TRANCOSO	(INESC-ID L2F, Portugal, ISCA President)
Michael WAGNER	(University of Canberra, Australia)
Renhua WANG	(University of Science and Technology of China, China)
Steve YOUNG	(University of Cambridge, UK)

(日本：顧問委員会、賛助委員会、実行委員会、各委員以外)

有木 康雄	神戸大学自然科学系先端融合研究環・教授、音声研究会委員長
速水 悟	岐阜大学工学部・教授、音声研究会元副委員長
市川 薫	早稲田大学人間科学学術院・教授
板橋 秀一	国立情報学研究所／産業技術総合研究所・教授
板倉 文忠	名城大学理工学部・教授
粕谷 英樹	国際医療福祉大学保健医療学部・客員教授，日本音響学会元副会長
桐谷 滋	神戸海星女子学院大学現代人間学部・教授
樽松 明	早稲田大学理工学総合研究センター・客員教授
桑原 尚夫	帝京科学大学生命環境学部・教授
牧野 正三	東北大学大学院工学研究科・教授
中川 聖一	豊橋技術科学大学工学部・教授
尾関 和彦	電気通信大学・名誉教授
鹿野 清宏	奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科・教授
東倉 洋一	国立情報学研究所・副所長／教授
山本 誠一	同志社大学工学部・教授
柳田 益三	同志社大学工学部・教授

## (10) 予算

収入	参加登録料	49,700 千円	
	* 一般登録	74,000 円×500 人	37,000 千円
	* 学生登録	39,000 円×300 人	11,700 千円
	* チュートリアル	5,000 円×200 人	1,000 千円
	展示会収入 (200,000 円×10 件)	2,000 千円	
	助成金等	6,000 千円	
	寄附金等	3,000 千円	
	合計	60,700 千円	
支出	会議準備費	15,300 千円	
	論文委員会	2,000 千円	
	* 委員旅費		1,800 千円
	* 会場費		200 千円
	実行委員会等	700 千円	
	* 会合費 (20 千円×5 回)		100 千円
	* 交通費 (30 千円×10 人)		300 千円
	* 賛助委員会		300 千円
	印刷費等	9,900 千円	
	* CD-ROM チュートリアル (2 千円×250 枚)		500 千円
	* CD-ROM 論文集 (3 千円×1,200 枚)		3,600 千円
	* アブストラクト集 (4 千円×1,200 冊)		4,800 千円
	* ポスター等		1,000 千円
	人件費 (10 千円 50 人日)	500 千円	
	その他	2,200 千円	
	* 消耗品費		500 千円
	* 通信運搬費		100 千円
	* 登録業務委託 (日本旅行, 含むクレジットカード)		1,600 千円
	会議運営費	36,000 千円	
	会場費	7,200 千円	
	* コンベンションホール 4 日間		2,000 千円
	* 国際会議場 4 日間		2,800 千円
	* 会議室 4 室 5 日間		1,800 千円
	* その他		600 千円
	バンケット等	16,400 千円	
	* バンケット (10 千円×700 人)		7,000 千円
	* ウェルカムレセプション (4 千円×830 人)		3,320 千円
	* 学生レセプション (4 千円×320 人)		1,280 千円
	* アトラクション		800 千円
	* 参加者経費 (飲物 300 円×8 千杯、バッグ他)		4,000 千円
	機器費用	4,800 千円	
	* プロジェクタ、ポスター		2,400 千円
	* 展示ブース		1,500 千円
	* インターネット他		900 千円
	人件費 (10 千円 100 人日)	1,000 千円	
	旅費/参加費補助	6,000 千円	
	* 招待講演者		3,400 千円
	* 学生参加者		2,000 千円
	* その他		600 千円
	その他	600 千円	
	* 消耗品費		500 千円
	* 通信運搬費		100 千円
	会議事後処理費	6,000 千円	
	旅費	300 千円	
	会議報告印刷・送付	300 千円	
	人件費 (10 千円 10 人日)	100 千円	
	ISCA 支払 (6 千円×800 人)	4,800 千円	
	会計検査	500 千円	
	予備費	3,400 千円	
	合計	60,700 千円	

## 9. 賛助の趣旨と概略

人間および機械における音声言語の処理は、理工学のみならず、音声学・言語学・生理学・心理学・教育学・医学・福祉学などの幅広い学問分野に関係する学際的課題である。また、音声言語は国・地域によって異なるため、その異同を明らかにし、相互の変換を行うことも重要な課題となっている。従って、音声言語処理研究の推進と関連産業の育成のためには、学際的、国際的な研究体制の確立が不可欠である。音声認識、合成など、音声言語処理に関連する産業は、現状では必ずしも大きなものとなっていないが、音声言語が人間のコミュニケーションの主要な形態であることを考えれば、音声翻訳、ロボティクスを始めとする音声言語処理技術は、将来的には基幹的な産業になり得るものであり、また、国籍・年齢・健康状態の如何にかかわらず、すべての人間にとって暮らしやすい環境を構築する上で重要な要素であって、我々はそれらを実現する責務を負っている。この観点から、40カ国以上の国々・地域から種々の学問分野に所属する音声言語処理の研究者が一堂に会し、研究発表・討議を行う INTERSPEECH の意義は、きわめて高いものである。

一方、INTER\_SPEECH の主催団体である International Speech Communication Association は世界的な音声言語処理研究者の組織ではあるものの、その財政基盤は弱く、各 INTER\_SPEECH の実行に際し、実行委員会がその財務責任を負うのが現状である。会議の実をあげるためには、理工学のみならず、音声学・言語学・生理学・心理学・教育学・医学・福祉学などの幅広い分野の各国からの研究者の参加が重要であり、参加者の負担を軽減するためには、賛助委員会を設立し、会議開催の経費の一部を、関連諸方面からの援助に頼らざるを得ない。

## 10. 援助要綱

- 1) 援助の内容／形態につきましては、賛助委員会会費の他、会場費等の開催経費の部分的な援助、展示への参加、学生参加補助、学生レセプション補助など、幅広く考えております。貴社の事情に即して、ご相談させてください。なお、賛助委員会会費以外の形態につきましては、他社の申し込み状況により、調整をお願いすることがありますので、予めご了承ください。

(賛助委員会会費に換えて募金／寄付金としての取り扱いが必要な場合は、あらかじめご相談ください。免除措置に対応することも可能です。)

- 2) 賛助目的                    INTER\_SPEECH 2010 の開催費の不足を補うこと
- 3) 賛助委員会会費        1口10万円(2口以上を基本) (ご相談ください)

賛助委員会会費の額(他の形態での賛助の場合は等価金額により計算)により下記のように、Gold, Silver, Bronze 会員とし、カテゴリーに応じた特典を提供します。

Gold 会員(8口以上) : 会議ホームページ、アブストラクト集への社名掲載、会議で



## 11. 問合せ先

### 会議に関するお問合せ

#### INTERSPEECH 2010 実行委員会

事務局 峯松 信明 東京大学 大学院情報理工学系研究科・准教授

Tel: 03-5841-6662

e-mail: [office@interspeech2010.org](mailto:office@interspeech2010.org)

ホームページ : <http://www.interspeech2010.org>

### 賛助に関するお問合せ

#### INTERSPEECH 2010 賛助委員会

幹事 荒井隆行 上智大学 理工学部・教授

Tel: 03-3238-3411, e-mail: [fs-office@interspeech2010.org](mailto:fs-office@interspeech2010.org)

幹事 峯松 信明 東京大学 大学院情報理工学系研究科・准教授

Tel: 03-5841-6662, e-mail: [fs-office@interspeech2010.org](mailto:fs-office@interspeech2010.org)

## INTERSPEECH 2010 賛助委員会

最高顧問	藤崎博也	東京大学（名誉教授）
委員長	白井克彦	早稲田大学
副委員長	古井貞熙	東京工業大学
副委員長	広瀬啓吉	東京大学
副委員長	畑岡信夫	東北工業大学
幹事	荒井隆行	上智大学
幹事	峯松信明	東京大学
会員	賛助企業より1名程度ずつ	

## INTER\_SPEECH 2010 実行委員会

- 委員 長 (General Chair)  
広瀬 啓吉 東京大学大学院情報理工学系研究科・教授
- 副委員 長 (General Co-Chair)  
匂坂 芳典 早稲田大学大学院国際情報通信研究科・教授
- プログラム委員会委員長 (Technical Program Committee Chair)  
中村 哲 情報通信研究機構・上席研究員
- プログラム委員会副委員長 (Technical Program Committee Co-Chair)  
津崎 実 京都市立芸術大学音楽学部・准教授
- スペシャル・セッション (Special Sessions)  
徳田 恵一 名古屋工業大学大学院工学研究科・教授  
加藤 宏明 情報通信研究機構・専門研究員
- チュートリアル (Tutorials)  
赤木 正人 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科・教授  
河原 達也 京都大学学術情報メディアセンター・教授
- サテライト会議等 (Satellite Events)  
河原 英紀 和歌山大学システム工学部・教授  
山下 洋一 立命館大学情報理工学部・教授
- 展 示 (Exhibits & Industries)  
武田 一哉 名古屋大学大学院情報科学研究科・教授  
庄境 誠 旭化成株式会社情報技術研究所・所長
- 財 務 (Finance)  
荒井 隆行 上智大学理工学部・教授
- 出 版 (Publication)  
小林 隆夫 東京工業大学大学院総合理工学研究科・教授
- 会 場 (Local Arrangement)  
小林 哲則 早稲田大学理工学術院・教授  
間野 一則 芝浦工業大学システム理工学部・教授  
大川 茂樹 千葉工業大学工学部・准教授  
菊池 英明 早稲田大学人間科学学術院・准教授
- 登 録 (Registration)  
嵯峨山 茂樹 東京大学大学院情報理工学系研究科・教授
- 広 報 (Publicity)  
篠田 浩一 東京工業大学大学院情報理工学研究科・准教授
- 総 務 (Secretary)  
峯松 信明 東京大学大学院情報理工学系研究科・准教授
- 国 際 渉 外 (International Affairs)  
河合 剛 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
- ホ ー ム ペ ー ジ (Web Page)  
高橋 登 東京大学工学系研究科・技術専門職員
- 国 際 担 当 (International Liaison)  
Campbell, Nick Trinity College Dublin・教授

## 実行委員会顧問

Isabel TRANCOSO	(INESC-ID L2F, Portugal, ISCA President)
Tanja SCHULTZ	(Universität Karlsruhe, Germany, ISCA Board member)
Douglas O'SHAUGHNESSY	(Université du Québec, Canada, ISCA Board member)
Denis BURNHAM	(Univ. of Western Sydney, Australia, INTERSPEECH2008 G-Chair)
Roger MOORE	(Univ. of Sheffield, UK, INTERSPEECH2009 G-Chair)
John OHALA	(Univ. of California, Berkeley, U.S.A.)
Anne CUTLER	(Max-Planck-Institute for Psycholinguistics, The Netherlands)
藤崎 博也	東京大学 (名誉教授)
白井 克彦	早稲田大学
古井 貞熙	東京工業大学